

船山仲他

1. 概観：現今の統語論研究の状態を一言で述べるならば、百家争鳴の観である。公刊物に現れる研究量としては、Chomsky の流れを汲むものがまだ一大グループをなしているようであるが、もはや、「変形文法」対「非変形文法」という図式では整理がつかない状態である。

2. 主な統語理論

2. 1. 統語構造を直接変換する規則を認める枠組み

《Government-Binding Theory (GB理論、統率束縛理論)》 旧来の変形文法における変形操作を極端に制限し、「統率」「束縛」というような概念に基づく原則を柱にしている。最近では、更にその方向に発展し、PPアプローチ (principles-and-parameters approach) という呼び方が好まれるほどになっている。

《Case Grammar (格文法)》 Fillmore(1968)以来、大きな発展はみられないが、機械翻訳や心理学の分野では今なおベースとなっていることがあるようである。

《Relational Grammar (関係文法)》

2. 2. 範疇文法

《Generalized Phrase Structure Grammar (GPSG, 一般句構造文法)》 統語素性を厳密に活用し、unification と呼ばれる操作を基本にして解析、生成がなされる。上掲の諸理論が統語構造間の直接的変換を考えるのに対して、この理論では、統語構造を生み出す規則相互間の変換関係を考える。

《Lexical-Functional Grammar (LFG, 語彙機能文法)》 統語構造上の特性を語彙項目の中に記述することに特徴があり、文法機能を変える規則も語彙的である。また、述語の低位範疇化は文法機能によって示される。

《Montague Grammar モンタギュー文法》

《Applicative Grammar 適用文法》 元ソ連の言語学者シャウミヤンの提唱する文法である。最近十数年ぶりに出版された著作の表題に「記号論」という言葉が入っているように、言語表現の記号論的本質を高度に抽象化した理論である。

2. 3. 認知構造を重視した文法

まとまりのある流れには至っていないが、Jackendoff や Langacker は、人間の認知能力と言語表現との関係をこれまで以上に深く探求しようとしている。Jackendoff(1985)等に、具体的な成果の一つを見ることができる。

2. 4. 機能文法 (Functional Grammar)

従来の、変形文法を中心とする狭義の統語理論では説明できないような現象に別の側面(言語表現の働き方)からも光を当てようとする考え方にこのような総称がつけられているようである。

3. 展望: 様々な技術的アプローチがなされているのが現状であるが、統語規則はできるだけ単純なものにし、特に動詞などの統語論的環境を語彙項目の中で十分に詳しく記述していく、という方向が大きな流れになっていると思われる。

主要参考文献

- Bresnan, Joan. (ed.) 1982. The Mental Representation of Grammatical Relation. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1981. Lectures on Government and Binding. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam. 1986. Barriers. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Fillmore, Charles J. 1968. The Case for Case. In Back, E. and R. Harms (eds.) 1968. Universals in Linguistic Theory. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Gazdar, Gerald, Ewan Klein, Geoffrey Pullum, and Ivan Sag. 1985. Generalized Phrase Structure Grammar. Oxford: Basil Blackwell.
- Jackendoff, Ray. 1983. Semantics and Cognition. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Jackendoff, Ray. 1985. Multiple Subcategorization and the θ -criterion: The Case of Climb. Natural Language & Linguistic Theory. Vol. 3. No. 3. 271-295.
- Šaumjan, Sebastian K. 1974. Applikativnaja grammatika kak semantičeskaja teorija estestvennyx jazykov. Moskva: Akademia Nauk SSSR.
- Shaumyan, Sebastian. 1987. A Semiotic Theory of Language. Bloomington: Indiana University Press.

(ふなやま ちゅうた、京都工芸繊維大学)